
スターリー・スカイ

Yoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スター・リー・スカイ

【Zコード】

Z2709F

【作者名】

Y.O.i

【あらすじ】

大学の臨海実習で訪れた、日本海の離島。実習最後の夜、宴会の騒ぎに疲れ果てた「私」は、一人施設の屋上へ上る。そこに待つていたのは、本州では見たこともないほど満天の星だった。

離島の夜空は晴れ渡っていた。

バーベキュー大会の時に見えた、厳肅な夕日はすでに水平線の向こうへと沈んでしまっており、辺りは静寂と、暗闇だけが支配していた。

施設周辺は港町になっていたため、昼間はそれなりに賑わいがあった。観光客田当てのサザエの壺焼きを売るおばさん達が、狭い通路の両脇で威勢の良い声を上げていて、どこからか焼きトウモロコシのにおいも漂つてくる、そんな場所だった。

冬は分厚い雪雲に閉ざされ、自殺志願者が絶えないと噂されるこの島だったが、夏は打つて変わって、本土の毎日がまるで一続きの悪夢だった気がするほどに、陽気で開放的な空が視界の果てまで拡がっていた。

そのような島の夜空である。見渡す限りの星空だった。

これほどの星が存在していることすら、私は知らなかつた。あるいは、広い土地に来て、自分の田が少しくなつたのではないかとすら思つた。しかし、いくら何でも、ここに来て数日でこれほどの星に気づくほど、田がよくなるとも考えられなかつた。おそらくは六等星だと、暗い星の代名詞のように数えられるそんな星までも、今日は私の瞳の中に、控えめに光を投げかけてくれているようだつた。

私は施設の屋上に寝ころんで空を見上げていた。幼い頃、獅子座流星群を見るために、道路に段ボールを引いて寝ころんで、同じよう

に夜空を見上げたことがあった。その時は、一時間に数個ほどの流れ星を容易に発見することが出来た。ともすれば自分が、偉大な星空に落ちていって仕舞いそうになる倒錯した感覚を味わいながら、幼い私は飽きもせず数時間もそうして星を見上げていた。

そのような遠い過去の思い出も、屋上で寝ころぶ私の脳裏には幾度となく去来していた。見つめていた物は確かに星には違いがなかつたが、それはその時に映つた星では、必ずしも無かつたのかも知れない。いつ見ても変化しない星空は、私に時間の経過を忘れさせるのに十分だつた。現在が過去になり、過去を現在形で語るようになり、星を見上げる私の意志は時間を自由に行き来していた。

「どうしたの？」

ふいに、すぐそばで声がした。私は顔を上げた。一人、女が立つていた。何がおかしいのか、女は微笑みを湛えた顔で私の顔をのぞき込んでいた。

「……いや。」

私はそう答えただけだつた。

星を見ていた。そう答えるのも、気障な気がした。

「寒くない？」

女は肩をすくめて言つた。昼間に来ていたT-シャツの上に、薄いカーディガンを羽織つただけの格好で、確かにその格好では夜の空気はつらそうだつた。

「中に入つてたら？」私は彼女に言つた。「まだ宴会は続いているんだろ？」「」

その日は、3日続いた大学の臨海実習の最終日だつた。昼間海に出て取つた魚介を器用な学生が調理し、一夜の思い出にと振る舞つて

いた。私はその会に、最初の1時間ほどは参加していたが、やがて疲れてしまい、喧噪を離れたくて、この施設の屋上に上がってきていたのだった。

ここは私が知る場所のはずだった。

ここへ来た初日の夜に、施設内を歩き回つて偶然見つけた屋上への出口。私はそれを、まだ誰にも教えていなかつた。別れの日を前にして、私はこの夜空に最後の挨拶をしておきたかったのかも知れない。静かな場所を求めて足は、自然とこの場所に向いた。

「よくわかつたな。」私は言つた。「結構わかりにくい場所にあるだろ。」

「そうかな。」女は言つた。「何となく分かつたよ。」

そう言つと、女は私の寝ころぶ隣に座つた。肩から提げたカーディガンの裾が私の腕に柔らかく触れた。何かの弱い香水のにおいがした。

「わあ！確かにす、いい星！」女は言つた。「これを見に来てたんだね！」

私は何も言わず、彼女の見上げる空を見上げた。星は暗闇の中で私達を取り囲んでいるようだつた。

「みんなも呼んでこようかな。」女は言つた。

「……いいよ。まだ宴会してるんだろう。」私はそれを止めた。

「星を見るつて気分でもないんじやないかな。」

「……そうだね。」女は応じた。「あんまり人がいても、ね。」

彼女はそう言つと、後ろ手をついて夜空を見上げた。

そうして僅かに口元を開けたまま静かに星空を見つめた。

「……ねえ。」行く分かの沈黙の後、女は言つた。「あの子とはどうなつたの？」

あの子、といつのは、同じ学年同じ学科に所属する別の学生のことだった。

私と彼女は当時、付き合っているという噂がささやかれていた。

「……知らないよ。」私は言った。「実際に付き合っているわけでもないし。興味もない。」

それは部分的には嘘だった。私自身はその時、その噂を決して嫌な気持ちで受け止めていたわけでもなかつた。私は人を愛する方法を知らない人間だった。「やさしさ」とは何か、と言う問いに、中学時代から悩み続け、すっかり疲れ果てているような人間だった。

「……そつか。」女はすんなりと私の嘘を受け入れた。微かに苦い気持ちが私の心の内を走つた。「彼女、今回は来なかつたね。いろいろ言われるのが面倒になつたのかな。」

「かもな。」私は言った。実際私も面倒に感じることはあつた。事実ではないことを言われ続けるのも、なんだか後ろめたかつた。

くしゅつ。

女が小さくしゃみした。

「さつさと中に入つたら?」私は彼女に言った。「明日また、しばらく船に乗るんだから」

「そうだね。」彼女は言った。「でも船からじゃ、この星空は見えないから。」

彼女はそう言つと、私の隣にじろりと寝ころんだ。彼女の腕が私の掌に触れた。

「わあ、空に落ちそづ。」彼女が歓声を上げた。「あの光つている

奴は、何?」

「……知らない。」私は答えた。星の名前など、実際知らなかつた。

「知らないで見てたの?」彼女は私の方を見て笑つた。「なにやつ

てんだが。」

「星の名前なんて知らなくたって」私は言った。「きれいだと思えば、それで良いだろ。」

「でも、星の名前をたくさん知っている方が、なんかかっこよくなかったり？」彼女は言った。「そういうところは欠けてるな。」

「きざつたらしげ。」私は言った。「名前なんてみんな後付だ。そもそも世界には、一つの名前もなかつたのに。」

彼女は笑つた。「負け惜しみ。」

言葉を失つて、私は息をついた。

彼女には、勝てそうもない。

「……でも、一理あるかな。」彼女は再び星空を見た。

「私達が生まれた時も、けんかして泣いた夜も、うれしくて笑つた日も、悲しい別れのあつた日も、星は同じように空にあつて、同じようにまわっていたんだね。……そうして何時か、私達が、この世界とサヨナラする時だつて、」

彼女はそこまで、少し間をおいた後、静かに続けた。

「同じように星は世界の空をまわってる。生まれた時と、ほとんど変わらない配置で。」

彼女は笑つた。「後から出てきたのに、元々ある物に名前を付けちゃうなんて……、入つて自分勝手な生き物だよね。」

そこで彼女は、がばと跳ね起きて言った。

「……ていうか、何言つてるんだろ、わたし。」彼女は私に向かつて微笑むと、

両手で私の手を取つて体を起こした。

「さあ、立つて。」

「何？」

私は嫌々立ち上がった。

彼女に握りしめられた腕の辺りが微かにひりひりした。

「今日は火星の再接近日！」

それは数日前から世間を賑わせていたニュースだった。

火星が、数十年に一度の大接近をする年に、その年は当たっていた。

「こんな星空を独り占めする気？みんなを呼びに行こう。」

彼女はそう言うと、私の手を引いて屋上の出口へ導いた。

空には満天の星。そのどれが火星であるのか、私は知らなかつた。だが、友人の誰かが、どの星が火星であるのかを、正確に知つてゐるとも思えなかつた。

我々は、各々の火星を見上げ、そしてその地球への接近を、心から祝うのだろう。

それもまた、私達らしいと思つた。

(後書き)

思って出をベースに作ってみました。

「日本海の離島」が、具体的にどの島にあたるのかは、想像に任せします。しかし、記憶に残る、すばらしい星の海でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2709f/>

スターリー・スカイ

2010年10月28日03時48分発行